

くらげのお使い

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、むかし、海の底に竜王とお后がりつばな御殿をこしらえて住んでいました。海の中のおさかなというおさかなは、みんな竜王の威勢におそれてその家来になりました。

ある時竜王のお后が、ふとしたことからたいそう重い病氣になりました。いろいろに手をつくして、薬という薬をのんでみましたが、ちつとも利きめがありません。そのうちだんだんに体が弱って、今日明日も知れないようなむずかしい容体になりました。竜王はもう心配で心配で、たまりませんでした。そこでみんなを集めて「いたいどうしたらいいだろう。」と相談をかけました。みんなも「さあ。」と言って顔をみあわせていました。

するとその時はるか下の方からこの入道が八本足でよろよろ出てきて、おそれる、

「わたくしは始終陸へ出て、人間やいろいろの陸の獣たちの話も聞いておりますが、

何でも猿の生き肝が、こういう時にはいちばん利きめがあるそうでございます。」
と言いました。

「それはどこにある。」

「ここから南の方に猿が島という所がございます。そこには猿がたくさん住んでおりますから、どなたかお使いをおやりになって、猿を一ぴきおつかまえさせになれば、よろしゅうございます。」

「なるほど。」

そこでだれをこのお使いにやろうかという相談になりました。するとたいの言うことに、

「それはくらげがよろしゅうございましょう。あれは形はみつともないやつでございます。が、四つ足があつて、自由に陸の上が歩けるのでございます。」

そこでくらげが呼び出されて、お使いに行くことになりました。けれどいったいあまり気の利いたおさかなでないので、竜王から言いつけられても、どうしていいか困りきつてしまいました。

くらげはみんなをつかまえて、片っぱしから聞きはじめました。

「いったい猿さるというのはどんな形かたちをしたものでしょう。」

「それはまっ赤かな顔かおをして、まっ赤かなお尻しりをして、よく木の上に上あがっていて、たいへん栗くりや柿かきのすきなものだよ。」

「どうしたらその猿さるがつかまるでしょう。」

「それはうまくだますのさ。」

「どうしてだましたらいいでしょう。」

「それは何なんでも猿さるの気きに入りそうなことを言いって、竜りゅうおう王おうさまの御殿ごてんのりっぱで、うまいもののたくさんある話はなしをして、猿さるが来たがるような話はなしをするのさ。」

「でもどうして海うみの中へ猿さるを連れて来きましょう。」

「それはお前まえがおぶってやるのさ。」

「ずいぶん重おもいでしょうね。」

「でもしかたがない。それはがまんするさ。そこが御奉公ごほうこうだ。」

「へい、へい、なるほど。」

そこでくらはは、ふわりふわり海うみの中に浮うかんで、猿さるが島しまの方ほうへ泳およいで行きました。

二

やがて向こうに一つの島が見えました。くらげは「あれがきつと猿が島だな。」と思いながら、やがて島に泳ぎつきました。陸へ上がってきよろきよろ見まわしていますと、その松の木の枝にまつ赤な顔をして、まつ赤なお尻をしたものがまたがっていました。くらげは、「ははあ、あれが猿だな。」と思つて、何くわない顔で、そろそろとそばへよつて、

「猿さん、猿さん、今日は、いいお天気ですね。」

「ああ、いいお天気だ。だがお前さんはあまりみかけない人だが、どこから来たのだね。」
「わたしはくらげといつて 竜 王の御家来さ。今日はあんまりお天気がいいので、うかうかこの辺まで遊びに来たのですが、なるほどこの猿が島はいい所ですね。」

「うん、それはいい所だとも。このとおりけしきはいいし、栗や柿の実はたくさんあるし、こないだの所は外にはあるまい。」

こう言つて猿が低い鼻を一生懸命高くして、とくいらしい顔をしますと、くらげはわざと、さもおかしくつてたまらないというように笑い出しました。

「はッは、そりや猿が島はいい所にはちがいないが、でも竜宮とはくらべものにならないね。猿さんはまだ竜宮を知らないものだから、そんなこと言っていばっておいでだけれど、そんなことをいう人に一度竜宮を見せて上げたものだ。どこもかしこも金銀やさんごでできていて、お庭には一年中栗や柿やいろいろの果物が、取りきれないほどなっていますよ。」

こう言われると猿はだんだん乗り出してきました。そしてとうとう木から下りてきて、

「ふん、ほんとうにそんないい所なら、わたしも行ってみたいな。」

と言いました。くらげは心の中で、「うまくいった。」と思いつながら、

「おいでになるなら、わたしが連れて行つて上げましょう。」

「だってわたしは泳げないからなあ。」

「大丈夫、わたしがおぶつていつて上げますよ。だから、さあ、行きましょう、行きま

しょう。」

「そうかい。それじゃあ、頼むよ。」

と、とうとう猿はくらげの背中に乗りました。猿を背中に乗せると、くらげはまたふわりふわり海の上を泳いで、こんどは北へ北へと帰つていきました。しばらく行くと猿は、

「くらげさん、くらげさん。まだ 竜宮^{りゅうぐう}までは遠い^{とお}のかい。」

「ええ、まだなかなかありますよ。」

「ずいぶんたいくつするなあ。」

「まあ、おとなしくして、すっかりつかまっておいでなさい。あばれると海^{うみ}の中へ落ちますよ。」

「こわいなあ。すっかり頼^{たの}むよ。」

こんなことを言^いっておしやべりをしていくうちに、くらげはいったいあまり利口^{りこう}でもないくせにおしやべりなおさかなでしたから、ついだまっていられなくなつて、

「ねえ、猿^{さる}さん、猿^{さる}さん、お前^{まえ}さんは生き肝^{ぎも}というものを持^もつておいでですか。」と聞^ききました。

猿^{さる}はだしぬけにへんなことを聞^きくと思^{おも}いながら、

「そりやあ持^もつていないこともないが、それを聞^きいていったいどうするつもりだ。」

「だつてその生き肝^{ぎも}がいちばんかんじんな用事^{ようじ}なのだから。」

「何^{なに}がかんじんだと。」

「なあにこちらの話^{はなし}ですよ。」

猿はだんだん心配しんぱいになって、しきりに聞ききたがります。くらげはよいおもしろがつて、しまいにはお調子ちょうしに乗のつて猿をからかいはじめました。猿はあせつて、

「おい、どういいうわけだつてば。お言いいよ。」

「さあ、どうしようかな。言いおうかな、言いうまいかな。」

「何なんだつてそんないいじの悪いわることを言いつて、じらすのだ。話はなしておくれよ。」

「じゃあ、話はなしますがね、実じつはこの間あいだから竜王りゅうおうのお后きさきさまが御病氣ごびょうきで、死しにかけておいでになるのです。それで猿の生き肝ぎもというものを上げなければ、とても助たすかる見込みこみがないというので、わたしがお前まえさんを誘さそい出だしに來たのさ。だからかんじんの用事ようじというのは生き肝ぎもなんですよ。」

そう聞きくと猿はびつくりして、ふるえ上があつてしまいました。けれど海うみの中ではどんなにさわいでもしかたがないと思おもいましたから、わざとへいきな顔かおをして、

「何なんだ、そんなことなのか。わたしの生き肝ぎもで、竜王りゅうおうのお后きさきさまの病氣びょうきがなおるといふのなら、生き肝ぎもぐらいいくらでも上げよ。だがなぜそれをはじめから言いわなかつたろうなあ。ちつとも知しらないものだから、生き肝ぎもはつい出しがけに島しまへ置おいてきたよ。」

「へえ、生き肝ぎもを置おいてきたのですつて。」

「そうさ、さつきいた松まつの木の枝えだに引ひっかけて干ほしてあるのさ。何なにしろ生き肝ぎもというやつは時々ときどき出して、洗濯せんたくしないと、よごれるものだからね。」

猿さるがまじめくさつてこういうものですから、くらげはすっかりがっかりしてしまつて、「やれ、やれ、それはとんだことをしましたねえ。かんじんの生き肝ぎもがなくなつては、お前まえさんを竜りゅうぐう宮ぐうへ連れて行つてもしかたがない。」

「ああ、わたしだつて竜りゅうぐう宮ぐうへせつかく行くのに、おみやげがなくなつては、ぐあいが悪いよ。じゃあごくろうでも、もう一度島まで帰かえつてもらおうか。そうすれば生き肝ぎもを取とつてくるから。」

そこでくらげはぶつぶつ言いながら、猿さるを背負せおつて、もとの島まで帰かえつていきました。猿さるが島に着つくと、猿さるはあわててくらげの背中せなかからとび下おりて、するすると木の上へ登のぼつていきましたが、それきりいつまでたつても下おりてはきませんでした。

「猿さるさん、猿さるさん、いつまで何なにをしているの。早く生き肝ぎもを持もつて下おりておいでなさい。」とくらげはじれつたそうに言いいました。すると猿さるは木の上でくつくつ笑わらい出だして、

「とんでもない。おとおいで。今日こんにちはごくろうさま。」
と言いいました。くらげはぶつとふくれつつらをして、

「何だつて。じゃあ生き肝を取つてくる約束はどうしたのです。」

「ばかなくらげやい。だれが自分で生き肝を持つていくやつがあるものか。生き肝を取られば命がなくなるよ。ごめん、ごめん。」

こういつて猿は木の上から赤ンベいをして、

「それほどほしけりや上がつておいで。くやしくも上がれまい、わあい。わあい。」
 と言いながら、赤いお尻を三度たたきました。

いくらばかにされても、くらげはどうすることもできないので、ベそをかきながら、
 ごすごす 竜 宮へ帰つていきました。

竜 宮へ帰ると、竜 王はじめみんな待ちかねていて、

「猿はどうした。どうした。生き肝はどうした。どうした。」

と、大ぜいくらげを取りかこんでせき立てました。

外にしかたがないので、くらげはせっかく猿をだまして連れ出しながら、あべこべにだ
 まされて、逃げられてしまった話をしました。すると 竜 王はまっ赤になつておこりま
 した。

「ばかなやつだ。とんまめ。あほうめ。みんな、こらしめのためにこいつの骨のなくなる

まで、ぶつて、ぶつて、ぶち据^すえろ。」

そこでたいや、ひらめや、かれいや、ほうぼうや、いろいろなおさかなが寄^よつてたかつて、逃^にげまわるくらげをつかまえて、まん中にひき据^すえて、

「このおしやべりめ。この出過^でぎものめ。このまぬけめ。」

と口々^{くちぐち}に言いながら、めちやめちやにぶち据^すえたものですから、とうとうからだ中^{じゅう}の骨^{ほね}が、くなくなになつて、今^{いま}のような目も鼻^{はな}もない、のっぺらぼうな骨^{ほね}なしのくらげになつてしまいました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：太久保ゆう

2003年8月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

くらげのお使い

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>